シャーロット・ブロンテの「ベルギー小品」について

藤田　晃代

序

「ベルギー小品」[1]とは，シャーロット・ブロンテ（Charlotte Brontë, 1816–1855）がブリュッセル留学中の1842–43年に，滞在先のエジェ寄宿学校で書いたフランス語作文をさす。[2] 学校開設を計画し，その準備のためにベルギーの首都ブリュッセルにあるエジェ夫妻の経営する寄宿学校において，シャーロットは妹のエミリと共にフランス語を学び，フランス語で作文を書いた。これらのフランス語作文を分析，研究した Sue Lonoff によると，「もっとも基本的なことは，シャーロット・ブロンテの作家としての成長過程で，フランス語作文は非常に重要であり，また彼女の初期作品と成人後の小説との間に存する『失われた環』である」[3]という。フランス語作文で取り上げられたテーマは，歴史，宗教，古典と多岐にわたるが，中でも特徴的なのは，同時代のフランス文学作品に関する，シャーロットの見解や解釈も含まれていることである。エジェ寄宿学校で古典と修辞学を教えていたコンスタンティン・エジェ氏（M. Constantin Heger）の教育方針のもと，シャーロットは，まさにホメーロスの『イーリアス』に代表されるギリシア古典からフランスロマン派の詩人ミルヴォワ（Millevoye）の詩，サン・ピエール（St. Pierre）の小説に至るまで，多数の文学作品に接する機会を得た。エジェ氏から提示された作品や題材を分析したものを，作文にしたうえで提出，添削指導を繰り返し受けた結果，「ベルギー小品」には，初期作品にはみられなかった書式の変化があらわれた。[4] シャーロットの初期作品が比較的，現実離れのした空想物語や妖精譚にあふれ，読み手もハワース牧師館内のきょうだいたちに限られていたのに対し，「ベルギー小品」では，外国語で作文するうえに，外国人の先生にみてもらう，という状況もあり，主題を客観的に分析し，論題を適確，明確に書くという姿勢がうかがえる。本稿ではシャーロットの「ベル

ギー小品」の中から，主題的にも語学的にも完成度の高い三作品，「死神の宮殿」(“Le Palais de la Mort”)，「詩歌によって救われたアテーナイ」(“Athènes sauvée par la Poësie”)，「手紙－貧しい画家から大領主へ」(“Lettre d'un pauvre Peintre à un grand Seigneur”) を考察し，従来いわれる「失われた環」としてだけではなく，「ベルギー小品」にすでに存するシャーロットの独創的主題を明らかにしたい。

1．「死神の宮殿」

「ベルギー小品」として編纂，研究されている，一連のフランス語作文だが，タイトルが示すのとは逆に，どの小品にも，シャーロットのベルギー留学中の実体験をもとにした逸話や体験談は含まれていない。(5) かわりに，エジェ氏を通じて学び，親しんだ文学作品や歴史に触発されて，シャーロットは学んだものを自身の作文に表現することに成功した。1842年10月16日に書かれた「死神の宮殿」は，シャーロットが歴史的舞台を設定して書いた小品である。「死神の宮殿」で言及されるのは，都市の建設，文明の発展そして人類の堕落である。「死神の宮殿」は先史時代の描写からはじまり，やがて興った文明の起源が述べられる。

> 「当時人間は自然の法則以外には何の掟も知らず，神以外のいかなる王にも服従しない　崇高な野蛮人であった。メトセラ，エノク，アブラハム，ヤコブはメソポタミアの野をうろつきまわり，駱駝が草を食む草地に出くわすとどこにでもテントを張る羊飼いに過ぎなかった。」(64–65, 下線部は筆者) (6)

この箇所に関するエジェ氏のコメントは，「古代国家は野蛮な状態ではない」(7) である。氏のコメントは当然，シャーロットの誤解を指摘するものであるが，「黄金時代」の終焉と父権制社会のはじまりについての次の文では，シャーロットは特に自然と文明の対比を明らかにしている。

> 「初期の族長たちの後を野心家の連中が継ぎ，牧畜生活を棄て，野や砂漠を去り，自分たちのために市を建てた。するとそこではぜいたくと，したがって悪徳とが彼らの住居に住みついた。」(65)

都市の建設は人間の「自然に対する制御」(8)，都市は，「権力，物理的な秩序と制限の源」(9) といわれる。しかしながら，「死神の宮殿」ではさらに都市の住民の悪徳と堕落に話題は及ぶ。悪徳と堕落はそれぞれ寓意的に表

現されるが，寓話こそは「シャーロットが親しんだ文学とフランス語作文をつなぐジャンルである」[10]という指摘もある。例えば，シャーロットがバニヤンの『天路歴程』に親しんでいたことはよく知られており，それを考えればフランス語作文の主題に寓話の手法を選んだのもうなずける。シャーロットは，死神の宮殿に集まった登場人物たちがそれぞれ，都市のヒエラルキー社会と力関係を綿密に守っていることを強調した上で，彼らがみな，死神に仕えるために宮殿に集結した場面をつづける。しかし，彼らは競争心のみを丸出しにして，いかに自分こそが死神に最も貢献しているかをまくしたてる。“野心”は，自分がいかに人間たちの心に入り込みやすいかについて強調する。

「どの人間であれ，私の影響がその心に滲みとおりますれば，その人間はたちどころに仲間の生命を手を触れてはならない大切なものだとは考えなくなります。私が接近いたしますと，すべての愛情，友情，恋情が飛び去ってしまうのであります。不和，憎悪，羨望，陰謀，背信が私のあとについてまわるのでございます。」(66)

“野心”の言葉に割り込むようにして話しはじめたのは“戦争”である。“戦争”は一気にまくしたてる。

「私は戦場からやって参りました。私の衣に流れるのを見た血でいまもまだ染っております。おお死神よ，いったい誰が私以上に陛下にお仕えできるでしょう・・・わが猟犬『大虐殺』と『大量殺戮』を人間どもにけしかけますれば・・・未亡人たちの嘆きや父親を失った子供たちの叫びによって陛下の勝利は宣せられましょう。」(67)

“戦争”の言葉は死神の統治に直結するものである。“戦争”はすべてを破壊し，人々に死をもたらすことで死神に最大の貢献をする。しかし，この宮殿での集会の「勝者」にシャーロットがえらんだのは“放縦”であった。“放縦”は性的放埒と無遠慮でもって人間に堕落をもたらす。この“放縦”によってもたらされた堕落は「死神の宮殿」で描かれる都市が古代バビロンと並行していることを示している。堕落のテーマが古代都市バビロンのイメージと重ねられる一方，シャーロットは死神の宮殿の描写に自らつくった「グラスタウン」[11]のイメージも投影させた。氷の宮殿の設計者は“冬”であり，材料はすべて「氷の海の底から持ち出した」[12]といわれている。氷の宮殿は青白い月光に照らされ，氷の丸屋根と列柱が並ぶ建造物として描かれている。氷を表すフランス語は“glace”であるが，こ

の単語には，英語でいう“glass”すなわちガラスの意味もあることから，この宮殿はシャーロットのもう一つのグラスタウンとも考えられるのだ。「死神の宮殿」においてシャーロットは初期のロマンスから脱却して人間と文明，都市の発展と堕落という根本の問題を書いた。しかし，同時に初期作品の舞台イメージも未だ投影させていると考えられる。

2．都市を見る者，都市のイメージ

「死神の宮殿」では，人間の堕落を古代都市バビロンのイメージにあわせて書いた一方，翌年の1843年10月6日，ほぼ一年経過して書かれた「詩歌によって救われたアテーナイ」では，歴史的主題はさらに前面に出て，小品自体，歴史物語の体裁をなしていることがうかがえる。シャーロットが舞台にえらんだのはペロポネソス戦争後，スパルタの勝利とアテネ陥落直前という，古代ギリシア世界である。アテネの歴史は，Lehanによれば，「紀元前499年から479年にわたって続いたペルシア戦争後，繁栄をきわめた」(13)とされるが，アテネの政治，経済，文化を発展させた原動力はアテネの民主制にほかならなかった。しかし，ペロポネソス戦争敗北後，アテネの市はスパルタによる攻撃と支配の危機にさらされる。幼い頃からギリシア・ローマの古典に触れる機会のあったシャーロットは，成人後ブリュッセルに留学中，チャップマン及びポウプ訳の『イーリアス』にさらなる関心を持ち，学習に励んだといわれている。シャーロットの古典学習には，弟ブランウェルの影響があったと考えられており，父の下でギリシア語，ラテン語の手ほどきをうけた弟と共に読書に励んだことで，シャーロットは少なくとも古典の基礎は知っていたといわれている。幼い頃から触れていた古典の基礎知識に加えて，ブリュッセルでエジェ氏を通じて習ったギリシア・ローマの文学はシャーロットの文学的視野を拡げ，さらに強固なものにした。「詩歌によって救われたアテーナイ」は，シャーロットがはじめて古代ギリシアの歴史に向き合った小品である。同小品では，スパルタの将リュサンドロスがアテネ陥落を目指したところからはじまる。この小品に劇的な効果を与えているのはアテネが陥落するまでの様子ではなく，捕虜としてスパルタの軍勢の前に連れてこられたアテネの詩人が月光に照らされたアテネの市を眺める場面にある。

「深い夜空は，星屑の溢れるような灯がともり，生き生きしていた。

広々とした野は月の光を浴びて銀色に輝いていた。はるかアテーナイの市を頂くヒメタス山，あの王冠の真珠のように月光をあびて光るパルテノンの堂々たる白い円柱，背後にはイーリッソス河，その波はあの光みちる空，あの由緒ある山，ディアーナの栄えある額を映していた。」(99)

アテネは今や，破壊される危機に瀕している。スパルタ軍の駐留する場所から，アテネの詩人が眺めた市の光景はまさに来るべき運命のもとにあるアテネ市であり，シャーロットの描く月の光を浴びて冷たく輝いたパルテノン神殿は，どこかグラスタウンを彷彿とさせるものがあるが，アテネの描写はここではピクチャレスクの手法をも喚起させる。エジェ氏の助言により，シャーロットは，「感情を引き起こす，強烈で生彩のあるイメージの効果」[14]を用い，自らの小品に描いた。また，ここで注目されるのは，アテネの詩人が危機に瀕したアテネの市を見る者として設定され，月の光に照らされたアテネの市はスペクタクルとして描かれているという点である。見る者と見られる対象物との関係から成るこのパノラマ手法は Nord によれば，「18世紀のヨーロッパ都市の描法を起源とし・・・19世紀の挿絵の流行と共にひろまった，都市の地誌学的眺望を文学に転写したもの」[15]であるという。この小品において，シャーロットは主題自体は古典に題材を求めたが，題材の中に「都市を見る観察者の姿」[16]によって特徴付けられる19世紀都市文学の萌芽を織り込んだことも特筆されるであろう。

「詩歌によって救われたアテーナイ」の後半部は，「エーレクトラーとアトレウスの家」[17]を題材とした挿入詩から構成される。スパルタ軍によって囚われの身となったアテネの詩人は，宴席でスパルタの軍勢のために謳うよう強要される。詩人は美しいアテネの市を思い，竪琴を手に取るとエーレクトラーの悲劇を謳い始める。父アガメムノーンの出征を嘆く娘エーレクトラーの姿ではじまるこの挿入詩自体の結末は悲劇であるが，シャーロットは小品の結末をアイロニカルにまとめた。小品では，アテネの市がスパルタ軍の攻撃をまぬかれたのは，詩人の歌がリュサンドロスはじめとするスパルタの者たちの心を動かしたからではなく，歌は，スパルタの軍勢には退屈きわまりなく，眠気を誘う効果以外，何ももたらさなかったからであった。結果，詩人は無事，故郷のアテネに帰ることができたが，アテネ側からすれば幸運な，スパルタにとってはいまいましい結末はアイロニーを込めて語られる。

「おお，恥かしい。不名誉なことだ！彼のアテーナイ人魂はこんな畜生のような無感情とは相容れなかった。だが，激怒が燃え尽きてしまうと，彼はわずかな野蛮人どもの愚かしさにみずからを悩ませるのは馬鹿げたことだ，とひとり言し[た]。」(105)

これらの言葉は，アテネの文化的優位とスパルタの後進性を対比させる効果をもつ。シャーロットはアテネの文化的優位をスパルタの残虐さや節度のなさを強調することで描き出したが，小品の終盤，目を覚ましたリュサンドロスの姿をかく筆致は，もはや古典の域には収まらず，19世紀散文文学の様相を呈するものとなっている。

「リュサンドロスは翌日眼をさましたとき，詩人のことも彼自身の復讐計画も両方ともまったく忘れ去っているように見えた。彼は頑固に冷水を一杯所望した。それからひどい頭痛を訴え，(声をひそめてサモス島産のぶどう酒を呪った。)・・・」(106)

二日酔いに悩むリュサンドロスの様子に続き，最後に筆者自身の見解が付け加えられる。アテネが救われたのに一役買ったのは酒であること，何においてもアテネが救われたことを書いた限り，自らが小品に課したタイトルは正当である，という“主張”である。「詩歌によって救われたアテーナイ」では，シャーロットは古典を題材にしながらも19世紀散文文学の二つの特徴を巧みに織り込んで小品に仕上げた。二つの特徴とは，19世紀都市小説の見る者と見られるものの関係構造，さらには，詳細な人間描写とアイロニーで仕立てるリアリズムの主題である。

3.「ベルギー小品」から小説へ

ブリュッセル滞在中，シャーロット・ブロンテはリアリズムの手法を学んだ。留学中に書かれた最後の小品「手紙—貧しい画家から大領主へ」(1843年12月22日）では，シャーロットがさらにリアリズムの手法を講じた姿がうかがえる。この小品はこれまでとは異なり，登場人物を同時代に近い個人に設定しており，語り手の青年画家が領主に対し，画家として名を上げ，地位を築くために，援助を懇願する書簡の体裁をとっている。語り手の画家，ジョージ・ハワードは画家として名を築くためにヨーロッパ諸国を放浪する。画家を主人公にする設定に関しては，「弟ブランウェルがロイヤル・アカデミーへ旅立ったときの興奮とそれについてのシャー

ロットの記憶に基づいている」[18]というみかたもあるが，ここでは，語り手ジョージ・ハワードが画家という職業に対する意気込みを詳細な語り口で語る姿勢をみていきたい。ジョージ・ハワードの画家になる決心に続いて彼のローマでの勉強の経緯が綴られるが，領主に対して自己を紹介するハワードの言葉には，強い決意がみてとれる。

「閣下，私は画家になることを楽しみにしてきた二十五歳の人間でありまして，ローマで勉強を終えたばかり，知人も両親もないまま，この国に参りました。パレット，絵筆，技量，芸術愛以外の財産はもっておりません。」(108)

ハワードがまず，第一に主張するのは，画家として成功する道が自らに与えられた使命である，とする決意である。彼が言う芸術愛とは，画家として生きる一途な思いにとどまらず，ここでは画家という職業そのものに対する誇りをも示していると考えられないか。仕事への誇り，それはそのまま自信へと直結するであろうが，ハワードの自信はとくに彼自身，他の人とは違った，特異な才能があることを認め，それを外に向けてうったえる箇所に見出せる。

「天才なくしてはいかなる芸術家も成功できないということに，全世界が同意するわけではないのでしょうか。・・・人間にはとても自惚れる傾向がございます。私は確実な方法をたった一つしか知りません。人は世間の中で生き，みずからを他人と比較し，経験の試練を甘受し，ネブカドネザルの炉よりも十倍も恐ろしい炉を通り抜けなければなりません。・・・私はひそかに泣きました。ついに私が自分自身の眼を開き，私自身の魂の中に天を覗き見る日がやって来たのです。」(110–111)

ジョージ・ハワードの自らの力に対する信頼が彼の芸術家として生きる姿勢を支えているといえよう。自らが選択した職業での成功，そして自立への道は，後の小説『教授』(*The Professor*, 1846年）におけるウィリアム・クリムズワースとフランセス・アンリの姿に結集すると考えられる。『教授』の主人公ウィリアムは仕事を求めてベルギーのブリュッセルに渡り，英語教師として成功をおさめ，彼の妻となるフランセスは，レース修繕からはじめ，最終的には学校経営者にまで上り詰める。ブリュッセル留学を経て，ハワースへ帰ったシャーロット・ブロンテがはじめて出版を目的として執筆した小説で扱われた主題が，夫婦共に働き，とくに妻が結婚

後も仕事を続ける，という当時大変画期的なものであったことを考えるとき，仕事での成功という主題がブリュッセル留学当時からすでにシャーロットの独自テーマとして存在した可能性が考えられる。たしかに，ジョージ・ハワードの場合，貧しさゆえに領主に財政援助を求めなければならなかった。しかし，仕事での成功を人生の最大事として扱う彼の姿に，同時代の人間の新しい側面をみることは十分可能であるといえよう。

結

これまで主に『ジェイン・エア』(*Jane Eyre,* 1847年）と『ヴィレット』(*Villette,* 1853年）によって知られてきたシャーロット・ブロンテが小説の他にも多くの初期作品をはじめ，詩や散文を残していることは周知の事実である。しかし，初期作品から最晩年の『ヴィレット』に至る，約25年のシャーロットの創作活動について，作品を総体して研究がなされ，論じられることはいまだあまり試みられていないように思われる。「失われた環」の「ベルギー小品」がシャーロット・ブロンテの創作過程において，晩年まで繰り返し用いられた主題—都市と人間，職業，見る主体としての個人，という一連のテーマと密接な関わりがあることを考えたとき，今後の「ベルギー小品」自体の研究の重要性を強調したい。

（本稿は，筆者の博士課程終了報告論文—(英文）の一部抜粋をもとに，研究ノートとして日本語要約をしたものである。）

註

(1) 研究にあたって典拠としたテクストは次の通り。Charlotte Brontë, *The Belgian Essays*, ed and trans. Sue Lonoff (London: British Library, 1996). なお，シャーロット・ブロンテの一連のフランス語作文の総称については，中岡洋氏の先行研究に基づき，また，各々が文学性の高いものであることから本稿では「小品」で統一した。

(2) 課題として提出を前提に書かれたものの意ではフランス語のdevoirsがこれにあたる。

(3) Sue Lonoff, "Charlotte Brontë's Belgian Essays: The Discourse of

Empowerment" (London: *Victorian Studies* Spring. 1989) 387.

(4) 書式の変化には当然，綴りや文法構造の正確化，適正化も含まれるが，ここでは論点を絞るために主題選択および主題構成のみをさすことにした。

(5) シャーロットのブリュッセル留学体験に関しては，後年，恩師エジェ氏に宛てた4通の書簡が公開されている。

(6) 中岡　洋編著，『ブロンテ姉妹の留学時代』（東京，開文社出版，1990年）。以下，本稿での引用は同書による。また，括弧内に頁数を示す。

(7) Sue Lonoff, *The Belgian Essays*, 216.

(8) Richard Lehan, *The City in Literature: An Intellectual and Cultural History*, (Berkley: University of California Press, 1998) 13.

(9) *Ibid.*, 15.

(10) Sue Lonoff, *The Belgian Essays*, 45.

(11) ブロンテきょうだいたちの初期の創作活動において，想像上のアフリカの都市，グラスタウンは多くの物語の舞台となっている。

(12) Sue Lonoff, *The Belgian Essays*, 218.

(13) Richard Lehan, 17.

(14) Sue Lonoff, *The Belgian Essays*, 45.

(15) Deborah E Nord, *Walking the Victorian Streets: Women, Representation and the City*, (New York: Cornell UP, 1995) 22.

(16) *Ibid.*, 1.

(17) Sue Lonoff, *The Belgian Essays*, 354.

(18) 中岡　洋，107頁。

参考文献

Brontë, Charlotte. *The Belgian Essays*. Ed and Trans. Sue Lonoff. New York: Yale UP, 1996.

Duthie, Enid L. *The Foreign Vision of Charlotte Brontë*. London: Macmillan, 1975.

Hoeveler, Diane L. and Lisa Jadwin. *Charlotte Brontë*. New York: Twayne Publishers, 1997.

Lehan, Richard. *The City in Literature: An Intellectual and Cultural History*. Berkley: University of California Press, 1998.

Lonoff, Sue. *The Belgian Essays*. Charlotte Brontë. New York: Yale UP, 1996.

——. "Charlotte Brontë's Belgian Essays: "The Discourse of Empowerment."

Victorian Studies Spring. 1989: 387-409.

Nord, Deborah E. *Walking the Victorian Streets: Women, Representation and the City*. New York: Cornell UP, 1995.

中岡　洋。『ブロンテ姉妹の留学時代』東京：開文社出版，1990年。